

母の待つ里

校 長 武井 正明

先日、不思議なドラマを見た。

社長まで上り詰めたものの、どこか虚しさを抱える独身男が、会員制の高額な「故郷疑似体験プラン」に申し込み、「架空の故郷」を訪れた。彼にもう、母はいない。

そこには、どんなときでも味方でいてくれる「架空の母」がいて、温かく迎え入れてくれた。男は今まで感じたことがない安らぎを得る…。

その架空の母親が、その男に言う。

「おめたちのほうが、おらよりずっと寂しいのではねえか」

どんな高級な料理よりも、母親が作ってくれた手料理に勝るものはない。多くの人間に囲まれて生活している都会人が、実は、過疎の進んだ田舎の人間よりも、ずっと心のどこかに孤独を感じているのではないか…。

見ながら、胸が熱くなってきた。還暦間近の役を演じる中井貴一と自分とが重なる。

おふくろに褒めてもらうために必死に頑張ってきたのに、もうその母はいない。亡くなってから、もう随分の時が経った。

嘘でもいいから、もう一度だけ、おふくろに会って、おふくろの手料理を肴に一杯やれたら、どんなにしあわせだろう。

この歳になっても、やはり母親が恋しいのである。

幸い私には、義母がいる。

この人が、安らかな笑顔で余生を送ってくれることが、今の私の一番の願いだ。最近、よく物忘れをするようになった。そんなことを気に病むことはない。いいじゃないか、責めちゃダメだよ。

妻は「なんでそんなにお母さんに優しいの？」と訊く。

闘病する実母に、なにもしてやらなかった罪悪感なのかもしれない。それを義母で罪滅ぼししようとしているだけのかもしれない。ただ、もうこの世に「お母さん」と呼べる人はこの人しかいないのだ。もはや義母ではなく、かけがえのない私のおふくろなのだ。

ドラマの原作は、私の大好きな作家のひとり、浅田次郎だった。

わかっているのに、いつも浅田次郎には泣かされる。

今回も、たった1本のドラマで、こんなに考えさせられ、こんなに泣かされた。

義母は今、自宅の近所にひとり住まいだ。一緒に住めば、物忘れも少しは良くなるかもしれない。というより、私が一緒に住みたいだけなのだ。

その日が来るのが、実はとても待ち遠しい…。